

新撰 鱈ヶ沢港案内真景図

令和二年発行

鱈ヶ沢港略史

津軽の霊峰・岩木山を仰ぐ鱈ヶ沢の港町は、山並みが海岸に迫り町並みは細長い。北は日本海に開かれ、南には白神山地につづく山々を背負っている。

鱈ヶ沢港の歴史は、安東水軍が活躍した中世までさかのぼる。江戸時代には、津軽藩屈指の御用港として発展し北前船がさかんに入港した。藩の奉行所が置かれ、船着場のある本町が船問屋の並ぶ中心街となっていた。本町付近には、米町、新町（塩町）などの商業町が形成された。一方、町の西部には寺院が集まり、浜町、釣町、漁師町など漁業民の多い町であったとされる。また、漁師町の裏町には遊郭街（新地町）があった。

明治時代になると、西津軽郡で最初の町となり、郡役所をはじめ、裁判所や警察署など数多くの官庁が置かれた。西津軽地域の政治的中心地としての性格が強まる一方、北前船の衰退により商業港としての繁栄は失われていった。

時代は移り、五能線が鱈ヶ沢駅まで開通。西海岸の豊富な水産物が鉄道で流通するようになると、鱈ヶ沢港は近代的な漁港として再生の道を進みだす。昭和七年、天童山を切り崩して始められた大規模な築港工事を皮切りに、戦後にかけて工事は継続され、港は拡大し続けた。

今に残る港の町並みや風景には、町衆が長い歴史の中で積み重ねてきた「町の年輪」が脈々と息づいている。

白神山地

岩木山

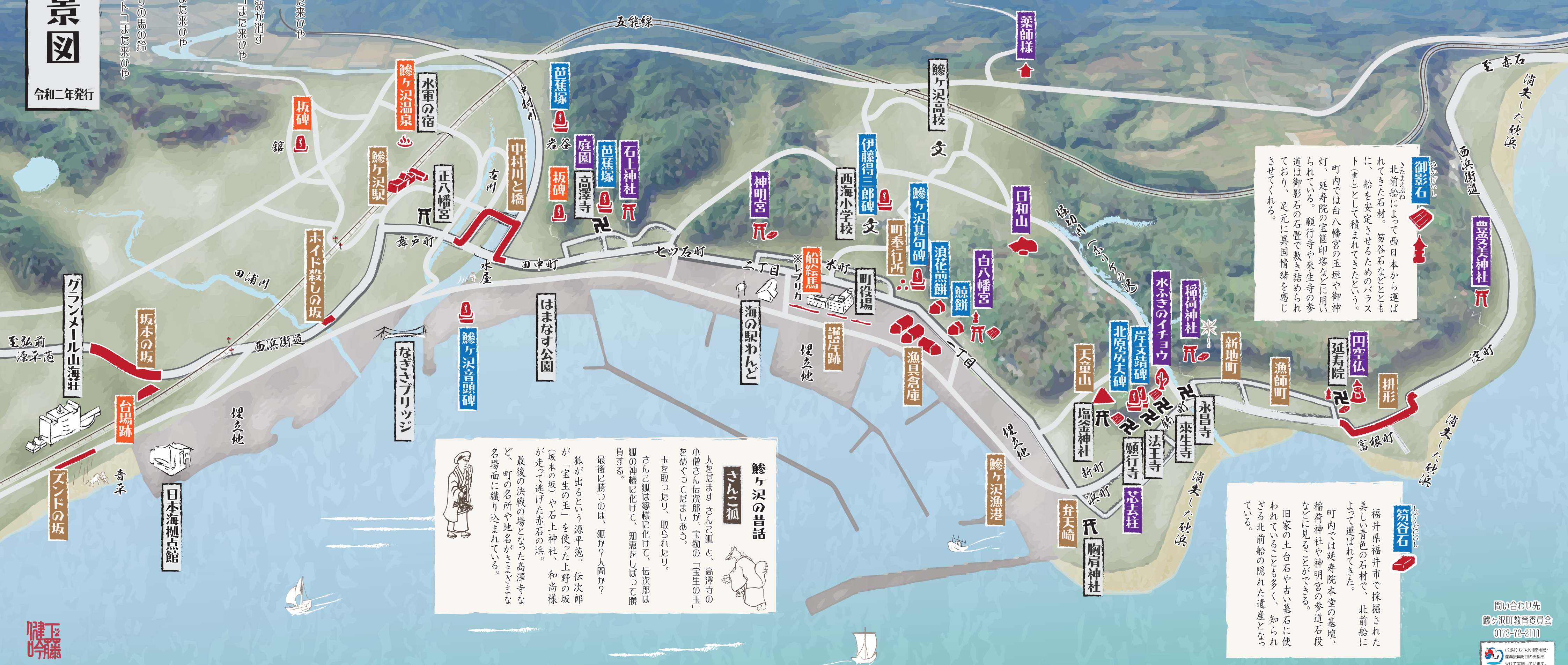
鱈ヶ沢音頭（昭和七年鱈ヶ沢築港起工記念）

天童山から指さす岩木山
松前通いの松前通いの船がゆく
鱈ヶ沢よいとこヨイヨイヨイト「また来ひや」
夏ばつれしい水屋の渚
砂で名産書ロア 砂で名産書ロア波が消す
鱈ヶ沢よいとこヨイヨイヨイト「また来ひや」
新地稲荷の宵宮祭し
あがる花火に あがる花火に流れる星
鱈ヶ沢よいとこヨイヨイヨイト「また来ひや」
雨は銀狼の音平浜に
出来島がえりの 出来島がえりの馬の鈴
鱈ヶ沢よいとこヨイヨイヨイト「また来ひや」

御影石
北前船によって西日本から運ばれてきた石材。笏谷石などともに、船を安定させるためのパラスト（重し）として積まれてきたという。町内では白八幡宮の玉垣や御神灯、延寿院の宝篋印塔などに用いられている。願行寺や來生寺の参道は御影石の石畳で敷き詰められており、足元に異国情緒を感じさせてくれる。

笏谷石
福井県福井市で採掘された美しい青色の石材で、北前船によって運ばれてきた。町内では延寿院本堂の基壇、稲荷神社や神明宮の参道石段などに見ることができる。旧家の土台石や古い墓石に使われていることも多く、知られざる北前船の隠れた遺産となっている。

鱈ヶ沢の昔話
さんご狐
人を厄ませるさんご狐と、高澤寺の小僧さん伝次郎が、宝物の「宝生の玉」をめぐる話だ。
玉を取ったり、取られたり。さんご狐は罫様に化けて、伝次郎は狐の神様化けて、知恵をしばって勝負する。
最後に勝つのは、狐か？人間か？
狐が出るという源平菟、伝次郎が「宝生の玉」を使った上野の坂（坂本の坂や石上神社、和尚様が走って逃げた赤石の浜。最後の決戦の場となった高澤寺など、町の名所や地名がさまざまな名場面に織り込まれている。



問い合わせ先
鱈ヶ沢町教育委員会
0173-72-2111

「公財」七ツ小川町地区
産業振興財団の支援を
受けて実施しています。